

---

# 親父のくせに

佐野隆之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

親父のくせに

### 【コード】

N8306W

### 【作者名】

佐野隆之

### 【あらすじ】

舞台は西暦2059年の名古屋。主人公の轟シンは大学受験を控えていた。シンの父、陽光ひろみつはヘビィ・ワーカー（四足ロボット重機の俗称）の操縦士でかなりの腕前であったが、酒と女が大好きな破天荒な性格だった。そんな陽光はシンに大学なんて行っても時間と金の無駄だと言って認めていなかった。しかしシンは陽光の言葉をまともに聞くことも無く勉強に励んでいた。

ある日、シンは陽光が頻繁に朝帰りをしたり、生活費をまともに出

すことも無く数日間家を空けたりといった親としての無責任さに腹を立て、家を飛び出す。

## 第1話 疑似家族旅行

『どうしてお袋は俺を産んだんだ？』

『どうしてお袋は俺を置いて親父に？』

『どうして俺が親父の世話してるんだ？』

『だから俺は生かされてるのか？』

なんて事を最近考えるようになった。もし、こんな自問自答をしている俺を笑いたかったら笑ってくれて大歓迎だ。自分でも笑えるから、ホント……。

でも、そんなこと考えた事無い奴なんているのか？

あ、思い出した。いるよ。親父だ。親父がそんな事を考える人間だったら俺はもつと目に見える世界が明るく見えて来れたんじゃないか？ そうつくづく思うこの頃だ

轟<sup>とんが</sup>シン<sup>しん</sup>17才の心には彼固有の思考がくどくこびりついてた。

もしこれを聞くことができたり、見ることが出来たりしてしまう邪魔な能力が人々にあつたとしたら飽き飽きするほどの論争が起きるかも知れない。もしくは人々がどれほど他人に対して思いの外無関心であることが露呈するのではないだろうか。

西暦2046年8月13日、轟<sup>とんが</sup>シン<sup>しん</sup>五歳の誕生日。曖昧さが雑じりつつも忘れられないシンの記憶。

この時、シンの父、陽光<sup>ようこう</sup>は三十六歳。母、真珠<sup>しんじゅ</sup>は二十八歳。この三人の家族は名古屋からリニア新幹線に乗り東京へと向かっていた。

リニア新幹線“みらい”の小振りな窓へ張り付きようにして外を眺めているシン。その目は見事などんぐり眼<sup>まなこ</sup>で無邪気さと純真さを持つ子供そのものであった。そのシンに覆い被さるようにして外を眺める陽光は特徴的な低いしゃがれ声で演説でもしているかのよう

な大声で言った。

「丁度俺が高校の時にこいつが出来てよお、修学旅行で東京まで行ったっけなあー！」

陽光の大声に訝いぶかしげな表情を露骨に作る真珠。そして窓の外の景色は勿論のこと自分の息子の無邪気で愛らしい姿にも興味の片鱗を見せることなく溜め息を出し、腕組をしたままレインドロップスタイルの茶色いサングラスの中の目は閉じていた。

ワクワク感一杯だったこの時のシンには自分がお母さんと呼んでいたこの人物の内的感情は知る訳も無い。だから無邪気な子供であり、子供は無邪気なのである。しかし無邪気さとは裏腹と言える、自分の『お父さんとお母さんの仲は良くない』『タロウくんやミキちゃんのところとは違うんだ』ということは確実に理解し、それを口にするのは子供として不利な立場になることを感覚的に悟っていた。それがこの頃のシンであった。

そのシンはハンドルを握って車を運転する動作をしながら陽気に歌っている。

「リニア・モーターカー リニア・モーターカー」

それを聞いた陽光はニッコリ満面の笑顔で言う。

「お、懐かしいCMソングだがや。平成おばさんアイドル3人組でやってたやつだろ？」

「もう、大きな声出さないでよ。だいたい、なんであんな朝から酒臭いのよ？」

父と子のやりとりに容赦なく無常な言葉差し込む真珠。真珠の呆れ顔はサングラスの中だ。それに対し陽光は真珠の横顔へ言う。

「これから遊びに行く時にそんなキンキンカリカリ声でつまんねえ事言うんじゃねえよ。つまんねえ女だなあ」

車両内に響くほどの声で諭す陽光であるが酒臭いのは事実であったし、非常識と周りからも非難される態度でもあった。しかしまたそれに対し「あなたの常識が欠けるからよ」と真珠が言えば「常識があつたら俺はここにいねえつつうーの」と返す陽光。売り言

葉に買い言葉。その予想通りの返事と自分自身の対応に真珠は可笑しくなり「ふ……そうね」とだけ言ってシヨルダーバッグからイヤホンを取り出し外界を遮断した。

真夏の突き刺す光が眩しい快晴の元、リニア新幹線“みらい”の窓からは軽快に流れていく風景が映し出されている。それは人々の群れが生活する街から町へと続き、次第に人々の腹を満たすものが生まれる田畑へと変化していく。そして人をも寄せ付けないような神々しい山々へと。それらの風景は5才のシンには大海そのものような広大な新世界、別世界に映ってみえた。

その中でもシンを釘付けにさせ心打つほどの景色は、シンの目いっぱいに入った富士山だった。

「うわあ、でっかい山！ きれい！」

シンと同様にその景色を見て感動した陽光も思わず声が出る。もちろんイヤホンで音楽を聴いていた真珠にまで聞こえる音量でだ。

「おおー、ひっさしぶりに見るフジヤマだぜえ。いいねえー。なあ、シン。男はよお、どんな時でもああいう風に、デーんと構えてなきやいけないんだぞ」

そう言って陽光はシンの小さな肩を優しく掴むとカクカクと揺らした。シンは少し頭がクラツとして一瞬止めて欲しいという気持ちで沸いたものの、肩から伝わってくる父親の熱さが“これは我慢しなくちゃ”と無意識に思った。

「あ、またトンネル……」

二人の目の前は暗くなり、父と子の間を繋いでいた富士山が目の前から消えた。

しかし数秒も経たずに再び二人の前に富士山が現れた。シンの目には実物その物を見ている事にしか思えないその景色は衛星映像を元に作られたCG映像である。

「リニアは景色が楽しめねえから、つまんねえなあ。やつぱ何でも生の方がいいぜ。なあ、真珠さんよお。別に“のぞみ”ちゃん（新

幹線)でよかつたんじゃねえの？ リニア高えし」

孤立を決め込んでいた真珠へ周りの目など構うこと無く大声で話かける陽光。

「早く着くからリニアの方がいいのよ。それに早く着けばそれだけ長い時間向こうで遊べるでしょ？」と真珠は独り言でも言っているかの様な調子で淡々と渋々応えた。だがその真珠の態度をいちいち気にする陽光ではない。シンから体を離すと自分も真珠のようにリクライニングシートに体を預けて続けた。

「まあ、そりゃそうだけどな。しかし気前がいいなあ、お前の奢りとは」と変わりなく大声で口にする陽光。

「アンタはケチだからそうでもしなくちゃ遠出なんてできないでしょ」

「儉約家と呼んでくれよ」

「全部、女と酒に使って私達のところにはろくに回って来やしないじゃないの」

「何を見たようなこと言いやがって」

淡々と言葉を発していたはずの真珠だが簡単に陽光のペースに乗せられてしまい言葉の汚れ具合と音量が増していた。

こういった自分の状態の悪化の原因はすべて陽光にあり、そして若き日の陽光へ一時の安息のために心と体を委ねてしまった過去の自分をすべてかき消し去りたいという思いだけに真珠の心は満たされてしまっていた。

そのせいでこの空間にいることに息苦しさを感じていた真珠は化粧室の入室ランプが消えるのを確認すると黙ったまま立ち上がり化粧室へと向かった。

「なんだ、しっこか？」

(つつたく……)

陽光の品のない言葉が真珠の耳に掛かかり口を開けかけたがそれに反射することの繰り返し返しが自分の弱さなんだと自分へ言い聞かせた。そして真珠は知的で懐深く能動的に自分を愛してくれるカイル

の元へと向かう事だけを胸に秘めていたのだった。

真珠は化粧室へ入ると今まで汚染された空気を吸い続けていたものを浄化するために大きく三回深呼吸した。そしてシヨルダーバッグから手のひらほどのコンパクトスタイル・スマートフォンを取り出し彼からのボイスメールを確認した。

彼女が東京行きを言い出した理由はここにあった

## 第2話 非家族的食卓

発信日時 2046年8月13日 月曜日 午前8時33分

発信元 Kyle Chandler

『おはよう真珠。君からのメールの予定通りなら今頃はリニアの中かな？ 僕は今起きたところだよ。何だか昨日は落ち着かなくなかなか寝つけ無かったんだ。今夜は食事の後、ひとまず君との暮らしに必要なものを一緒に買いに行こう。真珠の好みはある程度解っているつもりだけれどまだ少し自信が無くてね。ははは。でも目星はつけてあるんだ。じゃあ、今夜。またメールするよ』

イヤホンを通して真珠の耳に響く低くまるやかながらも爽やかさを感じる声。青年という言葉がしっくり来る男。紳士的な振る舞いにもまつたく嫌味がなく自分と同じ年の男とは思えない品格ある男として真珠はカイルを捉えていた。それは陽光との比較によるものも大きいと思うが、それを差し引いても真珠にとっては自分にふさわしい男だと決め付けていた。それはかつて学生時代に男子達から黒真珠とあだ名され持てはやされた若き日のプライドが呼び覚まされているせいかもしれない……

時は移り今から二ヶ月前。久振りに陽光と真珠そしてシンの三人で夕食を家で迎えた時だった。

「シンの誕生日なんだけれど、デイズニートリゾートでしない？」

真珠は柔らかい口調と朗らかな表情で陽光へ問いかけた。明らかに媚びだ。

「藪から棒かい。なんでわざわざそんな遠くてめんどくせえとこまで行く？」

自分の気持ちに寸分気遣うことなく応える陽光の言いぐさに真珠は媚び声と表情を瞬時に吹き飛ばし刺々しく言い放った。

「すぐ何でも『面倒くさい』だわねっ！ ほら、シンは喜んでるじ

やない」

真珠は陽光の隣に座るシンを顎で指して言った。そのシンはと言うと、目を丸くしてぽっかり口を開けて真珠と陽光の顔を代わる代わる見ている。

シンを見て陽光は「この顔は意味不明の顔だろ」と言っつてバカ笑いした。その陽光の態度に真珠は顔をしかめるも陽光の見方もあながちではないと思いつくさま自分の提案に同意させるためにシンを見やっつた。

シンの気持ちはというと真珠の意に反することであるつが陽光の言つたことの方に近く、その時のシンの心内は「デイズニールゾート？ めんどつくさい？」であつた。

「デイズニールゾートってナニ？」

シンは真珠に聞いた。が、真珠が口を開く前に陽光の言葉が入つた。

「だろ？ 女じゃねえんだからあんなチャラついた所に興味ねえんだよ」

「あなたがちつとも遊びに連れて行つてあげないから知らないのよ」「何言つてんだ。そういうお遊戯関係はお前の仕事だろ。俺は運んでくるもん運んでんだからいちいちグチグチ言つんじゃねえよ、田分け。だいたいそんなもんだつたらわざわざ東京まで行かなくてもナガシマでいいじゃねえか。俺が車出してやるよ」

大人の男と女の醜い言い争いを聞かされているシンだが、この会話の中から自分に必要な情報だけを聞き分け推理すると飛び出す様な勢いで声をあげた。

「ゆうえんち!？」

シンは以前、真珠に連れられて真珠の友人数人と一度ナガシマスパ일랜드へ行つた記憶が残つていたからそう推理したのだ。しかしこの時は太平洋と濃尾平野が一望できる大観覧車に乗つただけであとは手を引つ張られて大人の壁の迷路を連れ回された記憶しかない。真珠達はアウトレットモールでのショッピングの方に夢中だつ

たからだ。今度は遊園地内で目にした見たこともない恐ろしく大きくて動いて回る乗り物や他の子達が乗っていた自分で動かせるクルマに乗れるんじゃないかという期待感が無意識にシンの気持ちを興奮させた。

「お、ほれ。シンもナガシマが良いってよ」

シンの反応に弾むように言った陽光。それを無視してシンの説得に励むは真珠。

「シン、デイズニーリゾートはね、もーっと広くて今まで見たことないものがいっぱいあるのよ。ミッキーマウスや白雪姫もいるし」

真珠はシンにグツと近づいてオーバーアクションまで付けて言う  
とシンはその言葉に「ホント!？」と笑顔で聞き返した。シンは自分の想像が実現するかと思うと一層ワクワクした。

「ナガシマで十分だがや。ナガシマにはアンパンマンがいるぜ、シン。それに天然温泉があるしよお。お、そうだよ。温泉があるじゃねえか。温泉でのんびりっていうのも悪くないんじゃないの？ 家族風呂でゆっくりっていうのはどうだい？ 真珠さん。ひっさしぶりに？ シンがデカくなるともうできねえだろ？」

相手の気持ちや周囲の状況など考えた事もない男。むしろ相手を挑発して楽しんでいるかのような喋りっぷりをして自分を苛立たせる男。真珠は夫と呼ぶには恥ずかしいこの男とまともな会話を最近した覚えがない。抱き合うなどもっての外だ。陽光の話に聞く耳を持たずにシンへと話し続ける。

「リニア新幹線にも乗れるのよ？」

「リニア・モーターカー!？」

「そう、シンの大好きなリニア・モーターカー」

「リニアって、オマエ、俺にそんな金ねえぞ」

「この子の前でそういうの止めてもらえる？ いいわよ、私が払うから」

「なんだ、そんな余裕があるんだったら来月分の生活費は無しってことで頼むわ。ちょっとこここのところ余裕無くてなあ」

陽光の無責任でだらしない物言いに真珠はキレた。

「何言ってるのよっ！ とにかくこの子の前でそういうことを言わないでくれる？」

“家族の食卓”という空間を見事な金切り声で切り裂いた。その瞬間、シンは肩をすぼめ耳を手の平で塞いだ。陽光もシンと同じ動作をした。シンの方は目をしっかりと閉じている。そしてシンと陽光の二人は耳を塞いだまま顔を向け合い目を合わせると二人揃ってニヤリとした。

真珠は二人の動作の意味など気にかけることもなく、すでにシンの前でキレた自分をどこかへ捨てた状態でシンへ選択を迫った。

「シンはどっちがいい？」

「リニア・モーターカー」

シンは即答した。

「リニア見るくらい金城ふ頭の鉄道館で良いがや。俺もガキのころ親父に連れられてそっぴい行ったわ。面白れえぞ。よしっ今度連れっつてっつてやる」

陽光は陽光でシンを自分側につけようと躍起だ。

「いつ？」

シンは自分の父親は約束しても守らないことを無意識でよく理解していた。だから反射的に確約のために日時を決めるよう陽光に迫った。

息子に見透かされていることを知らない陽光はズボンのポケットからスマートフォンを抜き出し予定表を見て応える。

「うーん、来週の日曜の午後はどうよ？」

それに対して「ホント？」としっかり確認をとるのが当然のシン。それに対して「また連絡するわ」と曖昧なまま締めるのが当然の

陽光。

それに対して「本当に実現するのかしら」と嫌味たっぷりな真珠は言った。

そして結果は真珠の思った通りで、シンとの約束はリニア新幹線の玩具おもちゃで誤魔化し、東京行きには賛同してついて来た。

(現金な男…… 言動も行動も安易に読める陳腐な男……)

真珠の思惑通りに事が運び、自分の身を轟家から抜け出す準備はこつとして整った。

この時の記憶を元に思考するシン

親父とお袋の会話。いつも罵りあい。明るい家庭。明るい食卓。笑顔のある風景。家族三人揃っている時間はわずか一、二時間程度のことなのに……

夫婦円満、家庭円満。父親と母親の間で子供の手を取って歩いている姿を見て不思議だった。

俺にとって家族という括りが未だに理解できずにいる。

### 第3話 親心。子心。（おやじじる じじじる）

真珠しんじゆは今から一年ほど前、カイルと知り合った頃から外出時には色の濃いレンズを持った大きなサングラスをつけるようになっていた。それは陽光ようこうに感情を引きずられ自分を見失わないために。そして冷静でいながらもカイルに対する乙女心的ときめきを周囲に悟られないために。そして醜い男を直視しないで済むようにと。

しかし真珠は今日のような出来事が起きる度にサングラスをしていても周囲の目が気になって仕方なかった。陽光にのせられヒステリックになってしまふ自分をも見世物になっていくかのようで。しかしそれもあと半日で終わらせることができる。そう思うと真珠は自然に笑みがこぼれると共にサングラスの中の瞳は潤んだ。

化粧室で独り思い馳せる真珠。この時そんな事など知ること無く息子のシンと戯れているのが陽光であった。

\*

シン達を乗せたりニア新幹線“みらい”は東京都心部へと近づき速度が新幹線並みの巡行速度になっていた頃、シンを釘付けにしたきた窓からの景色は超高層ビルの数々が建ち並び、真夏の太陽の光をやかましいほど反射させ輝き放つ世界へと変わっていた。この首都東京を象徴する眩しい世界にシンはアニメの世界に自分が入り込んでいるかのようで、ひとつひとつ目新しいものを見つけるたびに「わぁ」「おおお」と感嘆の声を上げていた。

「しかし東京つちゆう所は窮屈だなあ。アホみたいに高いビルばかり並んでよお。しかもこんな線路沿いにマンションかよ。住んでるヤツらの気が知れねえわ」

と陽光が言う『気が知れないヤツら』が住んでいる線路沿いのマン

シヨンの一つにカイルの家はあった。真珠は横目で見苦しい陽光の頭越しに窓の外を見ていた。そしてカイルの住むレンガ色をした高層マンションを見つけると静かに目を閉じた。

(もう少しの辛抱だ……)

真珠の胸の内には陽光は勿論のこと息子の存在などなく、完全に独りの女と化していた。目を閉じているとマンシヨンからの瞬く夜景とカイルとの甘く濃厚に過ごした時間がフラッシュバックする。

明日の私は新しい自分になっている

もう過ぎた過去の自分は自分じゃない

シンが窓に貼りついて見ていた東京の街並みがトンネルに入り消されると今までのCGによる景色とは変わり、東京観光案内の映像と乗り換え案内の情報が現れた。そして車内アナウンスが流れた。

『本日はJR東海リニア中央新幹線をご利用いただきまして有難うございました。間もなく終点、品川へと到着致します。東京方面へ向かわれる方は……』

「ここで乗り換えるのかい？」

「そうよ」

「やっぱ面倒くせえな」

陽光のこの言葉をきっかけに真珠は下車の準備を黙って始めた。

今回は一泊二日の旅行という事になっている。普段なら一泊二日といえども比較的大きめでゆとりのある旅行鞆を用意している真珠だが今回は日帰り旅行並みの手持ち鞆である。実のところ、この手持ち鞆の中身は陽光とシンの着替えのみである。真珠は必要最低限の化粧品や貴重品だけをショルダーバックへ詰め込んで持ってきており、服や宝飾品など自分のものはすでに宅急便を使ってカイルの家へと送っていた。

そしてさきほどの陽光の独り言扱いされていた言葉にシンが応えた。

「ぼく、めんどろくさくないよ。つぎはどんな電車に乗るの?」

「ここからはね、電車じゃなくてバスよ。シャトルバス」

真珠は言葉こそ柔らかいが口調は単調で5歳児向けとは思えない  
淡泊さでシンの質問に答えた。

「うわああ!」

シンは真珠の口調を気にすることなく声になっていないような声  
で驚きを表した。

リニア新幹線からの景色や車内販売のお姉さんから父親が買って  
くれたアイスクリーム(ただし半分以上陽光の口へ)と初体験続き  
の中、今度はシャトルバスに乗れると言うのだ。いきんだ声でシン  
は聞いた。

「シャトルバスって飛ぶんでしょ?」

「んな訳ないだろ。バスが飛んだら怖いぜ」

笑って応える陽光。それに対してシンは興奮の勢いは保ちつつも  
残念気味に聞き返した。

「スペースシャトルは飛ぶでしょ?」

「お前、よくそんなモン知ってるなあ」

「テレビで見たよ。お空へ高く高く飛んで行っちゃうんでしょ?」

「あれは俺が生まれるとつくの昔にお払い箱になつとるわ。シン。  
宇宙なんて行つたつてどうしようもないぜ。人間うちゅうのはそん  
なところで生きるように造られてねえからよお。あんなもん無駄だ。  
ムダムダ」

陽光の語る話に耳を傾けていた真珠。夢を大げさに語る男は幼稚  
で、夢を現実的に実現に向け実直に語る男には魅力を感じていた真  
珠だが、陽光はもちろん前者に当てはまる。若い時はそんな男も男  
らしく見え、実際彼はヘビィ・ワーカーでも最も大きいモンスター  
クラスを操る日本でも数少ない人材だと言うことは知っている。し  
かし真珠にとって所詮土木工事は土木工事で、そこでバカでかいオ  
モチャを操っているだけにしか思っていない。そんなオモチャを操  
っているだけの男が人間がどうのこうのうと哲学じみたことを語る

ことは常に片腹痛くなるばかりであった。

リニア新幹線“みらい”は終点品川駅のホームへと優雅に進入する。薄青みがかかった純白を基調とした車体にヘッドライトからサイドへと伸びている深い青紫色のラインで飾られた流麗な車体は品格をも感じる。それを見たいがためにカメラ片手に集まる人も多い。そして今日は盆休みシーズンということもあり普段に増して人が溢れかえっているプラットホーム。窓に映ったその人々を見て陽光は叫ぶ。

「おいおい、なんだこの人間の束はっ!？」

「お盆だもの、混んでて当然よ。名古屋もいっばいだったじゃない。今さら何言ってるのよ。ほらシン、降りるわよ」

半ば義務的に応える真珠は窓に張り付いていたシンの肩を掴んで窓からシンを剥がした。

そんな母親の態度や行動に慣れているのはもちろん、シンの耳にはこの両親の痛いほど冷えた会話も聞こえていない。今はこの先に待ち構えている大冒険に対する気持ちでいっばいだ。

品川駅のホームにはリニア新幹線の中から見えていた以上に人々でごった返していた。轟家のような小さい子供を連れた家族もよく目立つ。

この頃のシンはこの人ごみ溢れる空間は嫌いでは無かった。しかし不思議に思う事があった。

なんでみんな笑ってるんだろ？

なんであの子達はお父さんやお母さんと手をつないで歩いてるんだらう？

この頃のシンには目に付いた家族連れすべてが不思議であった。自分がそれをお父さんやお母さんに言わないからだらうか？ そう

いった疑問として浮かび上がって来たのは小学生になってから。そしてそれが僻<sup>ひが</sup>みや羨<sup>やい</sup>みというものだと思<sup>おも</sup>ったのはシンが変声期を迎えようとした頃の事だ。

そんなシンの疑問はシンの頭の中にぼんやりと浮かび上がるだけのもので、表情や態度に表すことは無かった。そのせいなのだろうか？ 真珠はシンの手首を掴んで歩くくせがあった。今もシンは真珠に手首を捕まれた状態でリニア新幹線から降りて改札口へと向かって歩き始めていた。

シン達がリニア新幹線の先頭車両の横を通り過ぎようとしていた時、シンはVサインを作ってリニア新幹線を背景にして写真を撮ってもらっている子を見つけた。

お母さんと男の子が並んでお父さんがカメラ片手に「撮るぞお。もつとにーって笑って！」なんて言っている。その言葉にお母さんはしゃがみ込んで男の子と顔をくつつけるようにして楽しそうな顔をしている。すごい笑い顔。シンはお父さんとお母さんと三人でいる時には母親の笑い顔というものを見たこと無かった。笑っているときといえばテレビを観ている時か真珠の友達という時ぐらいだ。

(何があんなに楽しんだろ?)

#### 第4話 父の陽光。母の真珠。

轟一家は品川駅からデイズニーリゾート直行シャトルバスに乗り換えた。すべては真珠の計画通りだ。後は現地で適当に時間を潰し、夕方適当なところで二人とはぐれて終わり。

家族の一人がいきなり消息不明になれば普通世間では事故か誘拐かと家族親戚は大騒ぎするかも知れないが真珠にそれはないと100%を越えるほどの自信があった。

真珠は母親に育てられ父親は物心ついた時からいなかった。そして真珠が成人し働きに出るようになってからすぐに母親は男を連れ込み同居させた。その男を今更父親として認める気にもなれず、年頃の娘の存在を気にかけることも無い行動をとる陰気で嫌な男であった。男の見る目の無い自分の母親が情けなく真珠は早々に息苦しい家を出た。それから一度も連絡を取っていないし、あちら側からもない。

陽光自信も真珠の存在をどうとも思っていないのは分かっている。家政婦か子供のお守り係くらい。月に一、二度しか家に返ってこないような男が外でまともなことをやっているとは考えられない。

そんな男との間に子ができ、婚姻関係を結んでしまった自分もまた母親の血を引き継いだセンスのない女だと思つづく思っていた。しかしまだ自分には未来がある。時間はある。そう強く思い生きていけば活路に出会うものなんだともつくづく思っていた。

盆休み真っ只中のデイズニーリゾートは説明不要の人ばかりだ。

「こいつはまさに芋洗い状態だなあ」

面倒臭そうな口調で言う陽光だが顔は喜びひとしおで朝の雰囲気とは違っていた。酒もすっかり抜け陽光的華々しい充足感を味わう。

「やっぱ若え女が多いのおお」

鼻の下を伸ばすという言葉は遙か昔から彼のような男が必ずどこかしらに存在していたから定着した表現だろう。

陽光はそんな表情で何かを物色しているかのように辺りを見回しながら歩いている。そしてシンは陽光の肩の上だ。

「お父さん、恥ずかしいから降ろして」

「何言ってるんだ。こんな人混みの中でお前を普通に連れて歩いてたらずく遭難だ。首輪に紐つけられるよりは良いだろ？」

身長175センチの陽光に肩車されたシンの姿は人の群れの中でも際立ってよく目立つ。時折すれ違う西洋人からは笑顔で握手を求められシンは困惑していた。陽光はというと肌の色が違う人種の人達には何でも「ハローハロー」と大声で応えていた。もちろん真珠はその超旧世代的な対応をしている陽光に相変わらず呆れていた。

今になっても思い出すこの時のシンの気持ちは恥ずかしくも楽しく、優しい父親として陽光のことを素直に感じていた。シンにとっではむしろこの賑やかで楽しい雰囲気の中でピリピリとした険しい表情をしている母親のことが不思議であったし、嫌いであった。しかしそういう母親が意外な行動をとった時もあった。

「あ、お母さん！ ドナルドだよっ！」

シンは陽光の肩車のおかげで遠くまで見通せる。人だかりの向こう側にドナルドダックの着ぐるみを見つけた。そして陽光はシンを肩車したまま人だかりを掻き分けドナルドダックへと近づいた。その時の真珠は陽光を避けるような仕草は消え、陽光の後ろでウキウキしながら張り付くようにしてついた。実は真珠は「ミツキーよりもドナルドダックがだーい好きっ！」なのだ。真珠の性格ではずかずかと人垣を掻き分けて入っていくことができる勇氣はない。ここは陽光の活躍を利用して大接近する。

大勢の人たちに囲まれたドナルドダックとグーフィーの着ぐるみ。二人がひとつポーズを作るたび、いちいち女性たちの黄色い声が響く。

「おお、モテモテじゃねえか。着ぐるみのくせに」と難癖付ける陽光。

その陽光と一緒にいること自体に嫌気が差していた真珠であったが、ここでは今日一番と言って良いだろう柔らかい声で陽光へと呟いた。

「写真と一緒に撮ってもらおうよ」

それを耳にした陽光はすぐさま叫んだ。

「おおい！　ウチらと一緒に撮ってくれええ！」

陽光の低くしゃがれた声が見事に引き裂きドナルドダツクたちとその横にいたサポート役の女性の視線を一気に引き付けた。

その視線を確認すると陽光は女性に向かって両手を大きく振る。

その上にいるシンも陽光と同じように両手を振ってアピールする。

女性スタッフはシンの必死で可愛らしいアピールを見つけると手を振ってこちらへ来るようにと促した。

（やった！　やっぱりこういう時は図々しさと子供の愛嬌は武器になるわね）と真珠は思いつつ「すみませーん」と口にしなから小走りで陽光を追い抜きドナルドダツクへと近づいた。

「ほら、あなた。これで撮って」

真珠はスマートフォンを持った手を伸ばし陽光に向かって言った。

「あ、いいですよ。私が撮りますから」

それを見て女性スタッフはさすがに嬉しい笑顔を見せて言った。

「いいですか？　すみません」

と遠慮気味に言っただけ真珠は女性スタッフにスマートフォンを手渡す。

がしかし、（余分なものが入る……）というのが真珠の真意だ。

そこで「シン、ほら降りて。一緒に並んで撮りましょ」とシンと陽光を離して後で陽光の映っているところを切り取ることにしようとした。

「うん」と素直に真珠へ従うシン。

「おう、そうだな。それにちょっと疲れたわ」

と言つて陽光はシンを軽々と持ち上げ肩から下ろした。

女性スタッフは着ぐるみ達と轟家族を位置につかせると、「撮りますよお！ 一緒にいい！ せいの、ハッピー！」と心地よい発声に合わせて笑顔を作る三人。立ち位置はドナルドダック、陽光、そしてシンをはさんで真珠とグーフィー。なぜか真珠の意思と反してドナルドダックが陽光の方にいる。おかげで真珠は笑顔でいたくても笑顔になりきれずにいる。

「ありがとうおーっ！ 姉ちゃんっ！ そしてこの暑い中ご苦労さんよ、中の人！」

そう大声で言いながら着ぐるみの二人をポンポンと叩く。陽光の言葉を受けて二人の着ぐるみは額の汗をぬぐう動作をしてからガッツポーズを作った。

「またまたあー、ムリしちゃってー。熱中症には注意しろよ。俺も外で働いてるからよ、辛さ分かるぜ」

とまた大声で言つて陽光は着ぐるみ達にサムアップを見せた。

陽光が着ぐるみへ語りかけている間に真珠はそつと女性スタッフへ近づき言つた。

「あのお、すみません……。私とドナルドで撮ってもらえませんか？」

「はい。じゃあ」と快く女性スタッフは真珠のわがままを聞き入れ再びスマートフォンを手にした。

「やった」

と思わず声を出すと同時に小さく飛び上がると真珠は我を忘れて「きゃあーっ」と言いながらパタパタと小走りドナルドダックへ大きく手を広げて抱きついた。

どうしても家族写真というスタイルが我慢できずに口に出たことだったが結果満足いく写真が撮れていた。真珠はそれを確認するとその前に写っていた写真は即座に削除した。

今回の行程はすべて真珠が決めた。彼女の動機からしても当然であるが陽光は思いつきで行動する人間なので要領よく事を成すが無駄も多い。そして何よりシンが生まれてからはまともな宿泊旅行はない。と言っても今回も形だけの宿泊旅行だが。

真珠は少しでもアトラクションを楽しんでおきたいと思い、あらかじめ入場と同時にアトラクションの予約を入れておいた。しかしそれでも最初のアトラクションまで1時間弱の待ちがあった。

真珠は陽光がグチグチ言うんじゃないかと内心想っていたが、陽光はそれにはケチつけることなく真珠が気づかないうちに買っていたポップコーンを頬張りながらまわりにいる若い女性をサンプルにしてシンヘイイ女の見分け方を教えてやると言って能天気な独り言を喋っていた。五歳になったばかりのシンには全く意味が分ならず父親の言うことに頷くだけであるのに。

そして真珠はというと、アトラクションを楽しみにしていたはずなのだが、やはり自分の望む人と一緒に楽しむことで本当の楽しみが得られるものなんだとここへ来て改めて認識し、ドナルドダックと別れてからはさっきの嬉しさの反動か余計に陽光といることにつまらなさを感じた。そしてカイルの事を思うばかりだ。

彼だったらどんなことを言うのだろうか？

彼だったらどんな表情をするのだろうか？

真珠はその気持ちをそのままカイルへとメールで送った。カイルはきつと家で仕事に熱中している頃だろう。邪魔するのはよくないと思いつながらも気持ちを文字に表し送信するだけでも気持ちは安らぐ。

シンたちは真珠の手際良いアトラクションのコース設定と予約で最初のアトラクションだけは待ったがその後はスムーズにいくつものアトラクションを楽しんだ。と言っても、楽しんだのは陽光とシンの二人だけで真珠は二人を見送り出口で待つことのほうが多かった。理由はもう述べる必要はないだろう。「真珠さんよう、お前が

ここが良いって言ってわざわざ来たのに全然楽しんでなえなあ。少しはシンのことも考えてやれよ」

飽きもせずまた別のポップコーンを買って頬張っている陽光。そして陽光とシンの頭にはミッキーの耳が。真珠の思った通り陽光は来る前はぐだぐだと言っていたものの、結局は誰よりも一番楽しんでいる。彼の良いところはこういった場では明るく賑やかで楽しみを膨らましてくれるところだ。しかし真珠として鼻につくのが明るく振る舞うのはいいが普段はまともにシンの面倒をみない男が父親ぶってシンのことを気遣う言葉を口にするのだ。

「ごめんなさい。ちょっと歩き疲れたみたいで」

心にもないことを言う真珠。カイルとの約束の時間が刻々と近づいて来ていることからの余裕が生み出しているからだろう。

単純と言っている陽光は「そうか」と言っただけで納得した。そして続けて「そうだ。時間早いけど飯にしようぜ。休憩がてらになあ真珠さん？」

と陽光は気を使って言ってくれているかのように思い素人は騙される。相手の意思を聞いているようで実際はもう自分の中で決めたことが絶対でこっちが何を言おうが変わらない。昔でいう亭主関白。

という真珠の胸の内通り、真珠が返事を返す間もなく「お、ちよつどあそこに飯屋があるがや」と言ってさっさと店へとシンを連れ去ってしまった。

## 第5話 欠落

陽光が見つけて入ったレストランは夕時のピークからまだ遠い時間だったこともあり待つことなく三人は座ることができた。

「喉渴いたな。ビールでも飲もうぜ」

「いいわよ。私は遠慮しとくけど」

「なんだ、気味悪いなあ。ここはいつもなら『あんた馬鹿じゃない？』だろ？ よっぼど疲れてんだなあ。ここは俺が出すから真珠さんは好きなもんたらふく食べてちよ」

そう言いながら陽光はテーブルの天板に映し出されているメニュー画面を手のひらでフリップさせ品定めしている。その脇でシンは陽光がさっさとメニューを切り替えていく画面に合わせて目をぱちぱちさせて自分の食べたい物を探す。

「ぼく、これ」

セットメニューの画面になったところであるた遊びのようにシンは小さな手をトンとのせた。するとシンの触れたメニューの部分が大きくなり明るい女の子の声で『今日の人気度は2位のキッズランチだよ！ 今なら選べるデイズニーキャラクターのキーホルダーがついてくるよ！』とテーブルから聞こえた。

「やっばお子さまにはお子さまランチがお似合いだわな。よっ、お姉ちゃん。大人さまランチはないのかい？」

ちようどそこへ水を運んできた30才前後（陽光による推定）のウェイトレスへ陽光はしゃがれ声を飛ばした。陽光の声に少し目を広げ驚き表したウェイトレスだったが、グラスを品よく静かに置きつつ軽い笑顔を作って陽光へ丁寧に応えた。

「申し訳ありません。そういったものは用意いたしておりませんが、この辺りのセットメニューが大人の特に男性の方に人気がございますが」

ウェイトレスはテーブルの上で手のひらをしなやかに動かし肉類

をメインとしたメニュー画面へと切り替えた。

「おお、ガッツリとステーキいちやうか。俺、このサーロインのセットでライスの方ね。あと焼きはレアでね。血がぶあーって感じの」  
陽光は両手を広げ目をも剥きだすド派手なアクションで言ったものの30才前後（陽光による推定）のウエイトレスはゲスト向けスマイルを作るだけで冷静に答えた。

「申し訳ありません。この時期安全上当店ではミディアム以上の焼き加減しか対応いたしておりません。ですからミディアムでいかがでしょうか？」

「そつか。姉ちゃんが言うなら仕方ねえな。じゃそれで」

「はい。ではアメリカ産サーロインステーキのセット。ミディアムで。ライスとパンが選べますがどちらがよろしいですか？」

「もちろん米で」

「はい、ではライスで。あとお飲み物は？」

「アイスコーヒーを食後で。ブラックでいいわ」

「承知いたしました。坊っちゃんはキッズランチセットで良いですか？」

ウエイトレスは前かがみになりシンと目線の高さを合わせて聞いた。するとシンは「坊っちゃんなんて言うほどのものじゃないです」と妙な落ち着きで応えた。その意表をついた応えに陽光はガハハと大笑いし、シンの可愛らしい声と真顔の受け答えにウエイトレスはメニューシートで口を覆ってくすくすと笑った。

「シン。楽しいこと言ってくれるねえ。そうだな。ウチはそんな品の良いところじゃねえからな」としゃがれ声で大笑いする陽光。

正面に座る真珠は陽光の話に口を閉じたまま言う。

（品がないのはアンタだけだ）

真珠は表情一つ変えることなく頬づえをついて暇つぶしでもしているかのようにメニュー画面をフリップさせている。

「じゃあシンくんがいいかな？」

ウエイトレスは笑いを沈めつつ手にしていたフィルムノートタイ

プ（フィルム型電子端末）のメニューシートを一枚めくりシンに向けて見せた。そしてその画面の上に表示されていたミッキーマウスのロゴマークを指先で軽く触れるとフィルムノートの前にミッキーマウスやステイツチ、そしてドナルドダックといったキャラクターのキーチェーンの立体映像が現れた。

「オマケはどれが良いですか？ シンくん？」

シンに顔を近づけまるやかな声で聞くウエイトレスに陽光がしゃがれ声で口をはさむ。

「俺はお姉ちゃんが良いな」

それを耳にしたウエイトレスは間髪入れずに「それはできません」と冷ややかぎみに応えた。手慣れた感じだ。しかしそこへシンが「じゃ僕もお姉ちゃん！」と言つと、その愛嬌ある元気な言い方にウエイトレスは思わず大声で笑ってしまった。

「息子よ。見事だぞ。そうやって女の笑顔を引き出すんだ。今の前は可愛さが武器だからな。自分をよく知って使えるものはガツチリ使わんといかん」

陽光はシンの頭をポンポン叩きながら言った。

そこでウエイトレスは「奥様に叱られますよ」と真珠へと顔を向け「奥様はお決まりでしょうか？」と話の空気を入れ換える。

「おう、真珠さんは決まったかい？」

「私はスパークリング・アイステイーを」

相変わらずの事だけに真珠は笑う訳でも怒る訳でもなく静かに応えた。ウエイトレスからは良からぬ夫婦関係だなと推察されていることは明瞭であるが今さらここで芝居をする気はもうない。

料理がやってくるとシンと陽光は互いに分けあい食事を楽しむ中、真珠は時折ストローに口をつけてはスマートフォンばかり眺めていた。陽光は特段その行動は気にはしていなかったがステーキを頬張りながら真珠へ話しかけた。

「なあ、真珠さん。ホントに飯食わなくてもいいのかい？」

「ん？ ええ。……美味しい？」

「おお、でらウマだぜ。やっぱ肉はアメリカものだな。どうだ一口？」

陽光は一口大に切った肉をフォークに刺して真珠の目の前に。

「いいわよ」

真珠はそれに目をやることなく、ぼんやり露骨な退屈顔でストロークを回している。左手にはスマートフォンが握られたままだ。

陽光は真珠に男がいることはとうの昔から知っていた。その相手が何処の誰かまでは知らないが。しかし知ったところで別に自分の生活が変わるわけでもない。真珠が真珠でそれが幸せならそれで良い……などと言うほど深い考えあるわけでもないのが陽光の本意だ。分かりやすい話がとんとんであるから。それを知っていても知らぬふりで済ますわけである。

お互いがそのような互いの都合の部分は理解しているため適度な距離感を今日まで維持してきた。正確には維持しているように見せてきた。

誰に？ 息子に。いや、その前に周囲の人々に、だ。言葉を交わさずとも真珠と陽光の意思が一致していたところである。

では二人の関係が始まった頃はどうかだったのだろうか？ そう考えてみるのは真珠で、昔の思いを引きずることなく現在いまだけを満喫するのが陽光だ。その組み合わせが二人の現状をまざまざと物語っている。

真珠が疲れたからと言って入ったレストランでの食事時間であるわけだが、夫婦二人の行動に変化をみせることなく時間は流れ、約束通り陽光のIDクレジットで支払いを済ませると轟家は店を出た。外はもう陽が傾き周囲は華やかなイルミネーションで彩られ、よりファンタジックな世界と変化していた。

そのファンタジックな世界に酔いしれる人々の群れは昼間と変わ

らずごった返している。この時期の夜は電飾パレードと合わせて盛大な打ち上げ花火が行われる。それを目的にナイトチケットで夕方から来る客も多いせいだ。

そして今轟家がいる場所は真珠が抽選で当てた指定観覧席である。この区域一体だけには透明の屋根が取り付けられている。高さは20メートルを越える場所にあるためこの屋根があることに気づかない人もいる。昼間は紫外線カットや断熱効果に一役買い、雨の日には雨避けとなっている所謂アーケードなのだが、このアーケードには大事な役目がもう一つあった。それが夜のミュージカルだ。屋根全体がスクリーンとなり照明と映像が実際の夜空を背景にして非現実性の高い幻想空間を生み出す。それを観たいがために指定観覧席は競争率が非常に高い。

それが何がそうさせたのか、いつかは観たいと思っていた真珠はダメ元で予約を入れておいたら取れてしまっていた。これを皮肉に感じた真珠であったが、それも今の彼女にはもうどうでも良い思いだ。パレードもミュージカルも。この溢れる人だかりに紛れ自分の姿を消す時が刻々と近づいていることだけに気持ちは向いている。

午後7時。どこからか深く雄大に響く鐘の音がシンたちの耳に届いた。するとシンはもちろん陽光やパレードを待ちわびていた人々がざわつき始める。そして鐘の音は次第にゆったりとしたテンポとなつてくるとそれに同調して周辺のイルミネーションの光が弱くなっていく。それは日が沈んでいく様のように。そして最後の鐘の音の残響が消えると同時にイルミネーションが消え一瞬の闇ができた。

「おっ？」

陽光や初めてこのショーを見るものたちがその闇に声を出すがその続きを言わせないかのようにすぐさま今度は陽が昇るかのごとくにふわりと明るさが舞い戻り、やがて昼間のような強い光がシンたちのいる観覧席一带を包み込んだ。

そして観客たちの歓声をもかき消す程の音量の音楽が園内に流れ始めるとともに、その音さえも割って入ってくる声になっていない悲鳴と言える声がシンたちのいる場所から遠く離れた別の場所から聞こえてきた。

「おお、なんだなんだ」

陽光は声の方を見るものの人の頭ばかりしか見えない。

「ねえ、お父さん。あれ、ミッキーだよ」とシンは真正面へ指差した。

「お、いつの間に」

シンが指差した先には巨大なスクリーンがセットされておりパレードの様子が写し出されていた。

待ちに待ったパレードを陽光とシンはスクリーンを見ながら周りの客と一緒に手拍子をして楽しんでいる。その二人の姿を横目で見る真珠。もう彼女の目には知人よりも遠い存在。ただの見知らぬ仲の良い親子のように映っていた。

そこへ真珠の手に握られたスマートフォンが蛍のような柔らかい光を発しながらバイブレーションした。カイルからのメールだ。真珠は即座にスマートフォンのカバーを開き内容を確認する。そしてすぐカバーを閉じてシヨルダーバックへとしまう。

真珠はその後パレードに興奮している陽光のかくばった横顔へ目をやると『ようやくお別れね』と呟いた。その声はもちろん観客の声とパレードの音で誰の耳にも入ることはない。そして無邪気な笑顔を見せているシンを見やった。

（シン。ごめんね。私はこういう人間なの。そしてあなたはこの私とコレの間に来てしまった不幸な子……ごめんね。私は不本意な人生を続けるのが苦しすぎるの。ごめんねシン。私の事は忘れてください）

真珠には愛する者との別れの寂しさ、苦しさといった心を締め付けるような感覚はなかった。この瞬間は悲しい時ではなく、目映いほどの明るい未来への第一歩として踏み出す人生の転機の瞬間であ

り、むしろ胸踊る瞬間であった。

このシンの笑顔と呆れ返るほどのはしゃぎようを見せる陽光にここに連れて来たことは餞別として役にはたっただろう。

真珠はそんな思いだけを残してこの場から消え去った

陽光とシンはパレードから花火とのコラボレーションミュージカルまでたっぷり堪能すると一旦人の少ない通りへと移動した。

「なんかつい俺まで夢中になっちまったがやあ。やられたね、ただのお遊戯事と思って舐めとったわ」

と言ったところで陽光の胃袋が大きな悲鳴をあげた。

「腹減ったなあシン。シン、何が食いたい？」

「ラーメン！」とシンは即答する。

「おっ、いいねえ。さすが俺の息子だ。ここまで来てラーメンが食いたって言うのは俺とお前くらいだな。ラーメン食えるところはあるか？ 真珠？」

陽光は360度見渡す。

「お母さんいないよ」

シンは陽光を見上げて言った。

「きつと便所だわ。そのうち連絡来るだろ。俺達はラーメン探しに行こうぜ」

「うん」

陽光とシンはぶらぶら手を繋ぎながらさっきのパレードで覚えたミッキーの歌を陽光はでたらめに。シンは陽光の間違いを一つ一つ指摘しながら歩いて行く。

陽光はコツテリした汁に分厚い焼豚がのったラーメンを求めていたがやはりここはデイズニーだ。小綺麗で洒落たレストランやカフェばかり。陽光の望む現実的かつ庶民的なものは一切ない。

遊び疲れていたこともあり陽光はラーメン屋探しを早々に諦め、園内にある真珠が予約しておいたホテルへ向かうことにした。そして

そこで見つけた中華料理店へ入ると腹を空かしていた陽光は目についたものを手当たり次第に頼み5、6人前はあったであろう分量を簡単に平らげた。

「お会計は1万6千860円になります」

「マジかよっ！ そんなに食ったか？ 臥龍園だったら半分たぜ、きつと」

陽光はそう言いながらも右手を出しIDクレジットで会計を簡単に済ませた。

「ああいう店はお品良くていかな。一皿の量が少なえんだ」

「僕はちょうどよかった」

「だな。お子様向けだ。にしちゃあぼったぐり価格にしか思えん」

陽光は爪楊枝を口にシーシーやりながら店を出るとシンを引き連れてそのままエレベーターに乗って部屋へと向かった。

「しかし真珠のヤツ何やってんだ？ テメエの旦那と息子を放り出して」

「電話してみたら？」

「おっ」

Tシャツにジーパンのみの陽光がパンツのポケットを一通り漁ったあとTシャツの胸までも撫で回しスマートフォンを探す。

「あれ？ 俺、スマホ家に忘れて来たか？」

それを見てシンは小さな溜め息をひとつ出して言った。

「しょうがないなあ、お父さんは」

シンはたすき掛けしていた真珠のお下がりであるCOACHのミニシヨルダーバッグから自分のスマートフォンを取り出す。

「おい、シン。お前どうしたんだ、それ？」

「お母さんが買ってくれた」

「あの野郎。ガキにこんなもん要らねえつつうーの。シン、まさかエロ画像とか持ってないだろうなあ？」

「エロ画像って?」

「貸してみる」

シンからスマートフォンを奪い取る陽光は素早い動作でデータをチエックする。内心期待していたが、残念ながらその手の画像は無く、いつ撮っていたのか陽光には記憶が全くない自分や真珠が写っている今日の画像とシンの友達の画像と動画が少し入っただけだった。

「真珠のTEL番はもちろん入ってるよな?」

「うん」

陽光はシンのスマートフォンから真珠に電話する。それをじっと見つめるシン。

「出ねえなあ。まあいいや。そのうち帰ってくるわ。ああー今日はマジ仕事より疲れたわ。まあ、面白かったけどな。シン、風呂入ってサクッと寝ようぜ」

陽光はスマートフォンをベッドの上へ放り投げるとそのまま服を床へ脱ぎ捨てていきバスルームへと入った。

シンはその脱ぎ捨てた服を見て短い溜め息をつくとそれらを拾い上げてベッドの上に簡単に畳んで載せ、自分もバスルームへ入った。自分の母親がここにいないことに少しの不安を感じながら……

クイーンサイズベッドが二つあるこの部屋。一つは荷物置き場となり、真珠が持って来た旅行カバンと陽光の脱ぎ捨てた服と、きちんと畳まれたシンの服が並んでいる。そして残りのベッドにはトランクス一枚の陽光とミッキーマウスのシルエットパターンが散りばめられた青い浴衣を着たシンが眠る。陽光の筋肉質な硬く太い腕はシンの枕となつて。

この時どんな夢を見ていたかなんて覚えちゃいない。

こんな薄っぺらな男女関係で産まれ出てきた俺。親って何者なんだ?

その薄っぺらな大人は大人なのか？

思春期が近づくにつれ沸き上がる疑問。それは数珠繋ぎとなって  
答えなんて意味があるのか無限の輪を作りシンを襲う。

そしてお袋は俺達の前に二度と現れなかった……

## 第6話 父の陽光47歳と息子のシンの関係

西暦2059年。シンは普通科高等学校へ通う18才の少年と成長し、父、陽光はHW乗りとして働き轟親子は父と子二人で生活をしてきた。妻でありシンの母親である真珠が失踪したと言うのに陽光は何の行動も取ることなく……失踪から三年を過ぎた時、真珠から離婚承認申請を受けていた陽光であったが、それすら放置したままであったため自動的に離婚が成立していた。親権は陽光に渡すということだ。

『シン、いいか？ 人間はどんだけ頑張ったって自分独りだ。どんだけ惚れた腫れたで女と抱き合ったところで他人は他人で自分じゃない。生きるには自分独りでなんとかしなくちゃダメだ。食い物の調達、着るもの、住むところ、それを守るためにお前は勉強やら何やらをやらされているんだ』

陽光の教えは洗脳と言えるようなものだったと今のシンには言える。しかしそれがどういう性質のものであったとしてもそういう形で育てられてしまい、それに気づいたところで今さらやり直しはできない。

古典ハリウッド映画のように過去へ行くことができるのなら少なくとも自分を置いて消えた母親に接触して真相を知りたいし、まだ小さかった自分をなんとか今のようにならないように助けられるのに。いつそう自分を産まずに済むように陽光と真珠の出会いを阻止するのには。

もちろん現実には車が空を飛ぶようなことすらない今現在だ。そんな陳腐な思いを考える自分が馬鹿馬鹿しい。今は今を耐え忍び、馬鹿な親との関わりを絶つことだけをシンは考えている。

何であれ、今のシンは家事を簡単にやってのける技術は身に付けている。アルバイトでわずかながら自分のEDバンクに貯金もある。『それが親父のお陰だなんて全く思っちゃいない。誰にもそうは言わせない……』

なぜ？

『どうして小学生の子供が親の世話をしなくちゃいけないんだ？』  
という疑念を持っているからだ。

シンの止まない親に対する思考のこびりつきは激しく、今、そしてこれからの彼の原動力となっていくこととなる。これは幸福な事なのか？ それとも不幸な事なのか？ それを決めるのはずっと先のシン自身になるであろう。

\*

今日の夕飯は残り物で作ったあんかけ野菜炒めだ。あとは同じ具材で作った赤だし味噌汁。自分で食べるだけのものだ。別に自分の腹が膨らめば問題ない。シンには味に拘こだわっているだけの余裕はない。しかし今日はそれを二人分用意していた。

突然、普段連絡のつかない陽光から『今日ちよっくら帰るから飯頼むわ』とメールが入るとシンは気が向かないが陽光の分を一応用意していた。それを十年以上やってきた。だから慣れているかと言えは真逆である。

シン自身の自我が芽生え、思春期にもなれば反抗心も当然芽生える訳で自分の父親の勝手気ままな傲慢しつまんさを腹立たしく思っていた。しかし今の自分は腹立たしい父親の金で生活している。結局 いつもそこを突かれてシンが従うしかなかった。

この卑怯な父親のやり口にやり場の無い憤りを強く深く蓄えていたシン。せいぜいたまに顔を合わせる父親に対して口答えをして気を晴らすのが今シンにできる精一杯であった。

シンは食事を済ませると食器をシンクへ運びそそくさと手洗する。隣のリビングでは陽光が缶ビールを飲みながらリモコン片手にテレビを観ている。

「親父、少しは手伝えよ。俺、受験勉強で忙しいんだから」

毎回このシチュエーションで言っている言葉だが今日は“受験”という言葉をつけ加えてみた。

「受験って、お前、大学行くんか？」

シンは食器を洗いながら、陽光はテレビを観たままでの会話。

「ああ」

「あほか。そんな金はねえぞ。それに鷹が鷹を産むわけねえだろう。お前には無理だ。だいたい何のために大学行くんだ？ 頭使う前に体使え。HWは金になるぞ。金があれば女は寄ってくるしよお」

陽光の酔っぱらったたるい声での返事がシンの耳に届くとシンは苛立った。

(何かあればすぐ女だ。この梅毒野郎)

「女が寄って来るんじゃないかって親父が金出して女に会いに行ってるだろっ？ くだらねえ事ばかりに金使いやがって。金があるんだったらちゃんと生活費をきっちりくれよ。先月も家賃滞納しそつだっただぞ！」

シンは陽光を見ることなく声を上げた。

「悪い、悪い、つい忙しくってお前の口座に入金するの忘れとったわ」

「何が悪い、悪いだ。だいたい親父が世帯主のくせしてなんで家のIDバンクに給料入れねえんだよ？ おかしいだろ？ で何で俺がバイトした金を生活費に充てなきゃいけないんだよ！」

シンは言葉と同時に洗っていたお椀を強くシンクへと叩き置いた。そして二人の間には沈黙の空白時間ができた。

こんな会話を陽光と顔を合わせる度にしてきたシンは真珠が陽光

の元から離れていった気持ちは理解できていた。ただその男に自分を預けていった行動をどう解釈していいのかが解らず、常に頭の裏側でざわついていた。

ビールを飲み干した陽光は黙ったまま缶を握りつぶすとゆっくり立ち上がりダイニングへと来た。

苛立ちを隠せないシンはお碗を割ってしまいそうな力で押さえつけたまま手を震わせている。顔はうつむき視点は定まっていない。陽光はシンクの横にある冷蔵庫を空け中を覗くと淡々と言った。

「なんだ、シン。ビール買ってきてねえのか」

この言葉はシンの感情を綺麗に逆撫でた。

シンは陽光を横目で睨みつける。陽光はシンの態度など全く気にかけることなく舌打ちをして冷蔵庫の扉を閉める。

シンはお碗から手を離すと素早く蛇口を開け手の泡を洗い流す。そして陽光がゆったりとリビングへ戻ろうとしている体を濡れたままの右手で肩を掴んで制止させた。

肩に手が乗った事に気が付いた陽光は無意識に振り向く。シンは振り向いた陽光の胸倉を掴み、大声を張り上げ唾をも飛ばしながら陽光の顔に向かって叫んだ。

「そんなんだからお袋がいなくなっちまったんだろうがよお!!」

今のシンは気がつけば陽光よりも僅かながら背丈が高かった。僅かながらでも見下げた目線を見せた息子の大声に陽光は目を見開いて驚きの表情を見せた。

髪の毛にも白髪が目立つ歳となっていた陽光。今年で47歳。落ち着き払っていても良さそうな年齢であろうが、そこは陽光だ。所詮ガキの戯言たわごととして右から左へと聞き流すつもりでいても、実際は自分よりでかくなつたことでさえ気に入らないと思っていた陽光はシンからの気に入らない言葉と態度を受け、低く太く、そして昔と変わらない特徴的なしゃがれ声で自然に言葉が出た。

「誰に向かってその態度だ？」

「アンタだ」

反応の早い挑発的なシンの対応。

「ああ？ アンタだとお？」

陽光の赤ら顔で眠そうであった目つきがシンの反応で下から見上げる形でヤクザ的脅迫視線を使ってシンへぐつと近づき男臭い争いの幕開けを感じさせる緊張感が静まり返ったダイニングを埋め尽くす。

しかしシンには微塵の緊張も動揺も無かった。それは父親より背も伸び、自分で家事をこなし、家計のやりくりをし、今までの生活を維持してきた事実が生み出す自信が陽光の圧力を撥ね除けているのだらう。

「俺はお前の親父だ。俺がいなかったらお前なんかとつくに死んでただらうが。何様だ？ えっ？」

低音を響かせ迫る陽光。それを鼻で笑うシンは静かに怒りの感情を言葉に乗せクレシエンドしていく。

「アンタがいなかったら俺はいなかったらうよ。でもよ、その前にお袋がいたから俺がいるんだらうが。だいたい、アンタが俺に何をしてくれたって言うんだ？ ろくに家に帰ってこないわ、金すらまともに置いてきやあしない。それもお袋が居なくなつた時からなあーっ！！ 小学生の子供をよく平気で独り放りっぱなしできたなあ！ 迎いのキヨ婆ちゃんがいたから俺はなんとか自炊とかしてやってこれたんだぞ！ ナニ威張って親父気取ってんだ？ 俺はアンタの女か？ 飯の世話して金までバイトで工面して。それでアンタが俺の親父だと言うんかよ？ 親父なら親父らしくしてみるよ！」

胸倉を掴み上げ陽光を睨みつけるシン。

体が大きくなったと言っても陽光にしてみれば子供は子供だ。精神的余裕はシンの数十倍はある。陽光はニヤリと笑って言う。

「俺が種付けしたんだ。親父だろ？」

「……………」

シンを苦しめる陽光のふざけた言葉。シンを抑えていたものが取

り除かれた。

「テメエの不逞ふていさに俺は苦しめられてんだよお!!!」

シンはそう叫ぶと陽光を渾身の力で突き飛ばした。

その勢いは陽光の体格からは遠くかけ離れた軽量感で一瞬にしてシンから遠退き、陽光はそのまま足が絡んでしまい鈍く大きな音を立てて尻餅をついた。

陽光は酔っていたとはいえ自分の子供に簡単に突き飛ばされた事実  
実に発狂した。

今さっきまで酒に酔ってゆったりとした動作を見せていた陽光が瞬時に起き上がりシンに向かつて一言も発せず左肩から体当たりをした。そのあまりの速さにシンは何が自分に起きたか分からないまま吹き飛ばされシンク前に置いてあったワゴンへぶつかりキッチン  
の床周りへ食器やわずかな食べ残しが散らかった。

陽光の体当たりは完璧な不意打ちであった。シンのみぞおちへ見事にはまり、シンは息のできない状態で倒れ込み苦しむ。

陽光はそのままシンへ馬乗りになって叫ぶ。

「グダグダと文句タレてんじゃねえーっ！ 男っちゅうもんは独りで生きてく力をつけなくちゃいけねえだ！ なんだかんだ言ってお前は独りで生きてく力をそうやってつけてんだっ！ 俺のおかげだろっが！ この世の中は温々ぬるぬるほんわか社会じゃねえんだ。分かるか？ だからテメエのお袋はお前を置いていったんだ。俺のせいじゃねえよ。俺は今、ここに居るだろ？ 分かるか？」

一気に言葉をシンに吹き掛けた陽光の息遣いは荒かった。

シンにとって陽光の理解不能の理屈は反抗心に拍車がかかる。シンは呼吸を取り戻すと一気に陽光を跳ね飛ばし起き上がった。

息を整えていた陽光は再び不意を突かれて軽々とシンにはね飛ばされ床へと転がった。

「自分の女に逃げられたことを理不尽な理由をつけて自分を正当化してんじゃねえよっ！」

「なんだとおお!？」

よたつきながらもすぐに起き上がった陽光。

「アンタのだらしなさが全てだろうがあっ！俺はアンタらに望まれて生まれて来たわけじゃねえんだろ？俺だって望んでアンタらを親に持ったわけじゃねえんだ！」

「子供うちゅうのは皆ヤツちまったから生まれてくるんだ。理屈じやねえんだよ。好きだとか愛してるなんてそんなキレイな言葉で片付けるようなモンじゃねえんだ。だから頭使うヤツはダメなんだ。すぐあれこれ理屈をつけたがる。ったく顔だけじゃなく性格まで真珠そのものだな」

陽光はそう言って大笑いした。

無駄と分かっているにも収まらない気持ちに苛立ちが激しく残っていたシンであったが、これが自分の立場なのかと諦めの気持ちも抱き合わせた状態に疲労感が沸き起こりぽつりと声を漏らした。

「これが自分の親だなんて信じたくないね……」

## 第7話 上甌町朱美（かみこしきまち あけみ）

上甌町朱美 19歳（2059年9月現在）。地元の短大保育学科へ通うごくごく普通の女子である。

好きな食べ物はパンケーキ。パンケーキはよく自分で色々アレンジして作る。そんなことで名古屋駅にあるパンケーキショップでアルバイトもしている。将来は可愛い子供たちと一緒にパンケーキを作って暖かい時間を過ごすこと

朱美はシンと付き合い始めて半年ほどになるがシンとの出会いに早くも“これは運命の出会いだ”と強い思いを抱いていた。

朱美とシンの出会いは随分と遡る。朱美が小学三年生でシンが小学一年生になった時だった。シンと朱美は家が近所であったことから朝の分団登校はいつも一緒だった。

朱美のいた分団はシンが入ってくるまで自分が一番下であったため、やっと自分の下が入ってきたと大喜びし一人っ子の朱美はシンを弟のように可愛がった（お節介なくらいに）。シンも母親が居なくなつた事の寂しさを埋め合わせてくれるような家族的存在として朱美を慕った。

しかし朱美が中学生となると当然のように二人は家が近所といえども疎遠になった。

ひとつ付け加えると、シンが四年生になった頃から同級生から「いつも上級生の女とイチャついてる」とからかわれていて、それが嫌でシンの方から朱美との距離を次第に置くようになっていたことも疎遠となる理由としてあった。

そして時は進み、朱美が高校三年になって間もなく、朱美に運命的と思わせる出会いがあった。彼とケンカ別れをし、自分は受験に

全てを注ぐぞと決めた矢先のことである。

「あれ、シンちゃん？」

「あ、あみ姉ちゃん？」

学校帰りの校門で二人は再会した。偶然にシンも朱美と同じ高校に入っていたのだ。

因みに朱美は“あけみ”と言う響きが可愛くないと言ってシンには“あみ”と呼ばせていた。シンが朱美の本名を知ったのは最近のことで、朱美のＩＤカードを見たときだ。

そして二人は登下校を共にするようになり、わずかな時間で抱き合う仲となった。

その中で朱美はシンの母親が失踪していた事を初めて知った。この世の中にそんな無責任な母親が本当にいるのだと強い衝撃を受けた。

そしてシンはいつもほとんど独りで過ごして来たこと。シンの迎いに住んでいた一人暮らしのお婆ちゃんがシンのことを気にかけて色々とお親切にしてくれたこと。そのお婆ちゃんはシンが小学六年生の時亡くなってしまって独りで大泣きしたこと。そして父親の奇行。

すべてが朱美には驚くことばかりで、それを知らずに一緒に遊んでいた自分はなんて鈍い人間だっただろうとさえ思った。たとえその時の自分が小学生の子供だったとしても。今までのシンの苦労を聞いた朱美は自分でもハッキリと分かる母性本能がシンを受け止める力を強くし、シンを心の底から支えたいと思っていた。

二人が愛し合うようになってからの二人の関係はより熱く強固なものとなり、順調に時を共に過ごしてきた。朱美は無事志望大学に入学。そして今現在シンが受験に向けて頑張っているところである。

\*

朱美はいつもふらっとシンの家に遊びに行く。勉強の邪魔は良くないよな、と思いつつも差し入れだとか、夜食を作つてあげたりだとか、部屋の掃除をしてあげたりだとか……何か理由をつけて。

ただ、シンにはまったくのお手上げというほど家事の類はきつちりとやつてしまうので自分の出番がないよなあと思つてもいる。それでもシンの邪魔にならない程度には役に立ちたいし。しかし本当はシンに抱いてもらいたいという下心の気持ちで会いに行つていた。いつも家にはシンしかいないから……。

今夜はというと、これといつてやっぱり理由はない。家が歩いて10分もかからない距離だからちまちまとメールのやりとりは面倒なので会いたい気持ちだけでシンの家と向かつていた。朱美として同棲したいくらいだったが、親が許すわけないので今は我慢している。しかし、自分が社会人になつたら家を出ようと思つている。そうしたらシンの家で一緒に生活しようと独り計画していた。

シンの家の近くまで来ると、シンの家の前に大きな車が止まっていた。

「何、あんな人の家の前に止めちゃつて」

遠くからは暗くはつきり分からなかったが、よく見ると工事用の特殊車両であった。

「何これ？　なんでこんなのに止まつてるの？　玄関の真ん前じゃん」

朱美はぶつぶつ独り言を言つて特殊車両と家の隙間に体をすべり込ませ玄関ドアの前へ来るとベル・ボタンを押した。

「……」  
反応がない。もう一度ベル・ボタンを押す。

「……」  
反応はない。

「あれ？　いないのかな？」

もう一度ベルを鳴らしてみても反応がなければ電話してみようかと思ひ、朱美は再びベル・ボタンを押した。

今度は扉の向こう側から扉を振動させる鈍い音が朱美の耳に聞こえてきた。そして何か怒鳴り声のようなものも聞こえる。

「え、何？」

朱美は一旦ドアから少し身を引き、きよろきよろと辺りを見渡した。そしてドアそつと耳をあててみる。

「……！」

シンが叫ぶ声。そして聞いたことのない低いドスの聞いた声が聞こえた。

（やだ、まさか泥棒とか？）

朱美は少し怖かったがシンの身に何かがあつてはという気持ちの方が強く無意識にドアノブに手をかけていた。

「開いた……」

朱美はドアにカギがかかっていることでも更に不安と恐怖心が湧き起こった。しかし、そのまま静かに家に入る決心をした。非常時にも冷静さがなかなかなのが朱美という女性である。ドアを開け家に入ると見慣れたシンの靴以外にもうひとつ男物の汚れた靴が綺麗に並んでいるのを見つけた。

（もしかしてお父さん？）

朱美の感は鋭かった。滅多に帰ってこないと聞いていたシンの父親。おかげでシンにこの家で甘えることができているのだが。

朱美はシンから父親の事を色々聞いていて酒癖も悪いとも聞いていた。そこから察して親子喧嘩はアリだと思った。しかし、断定はできない。下駄箱の横に置いてあったシンの傘を手にすると、忍び足で光が漏れているダイニングへと近づいた。

「アンタのだらしなさが全てだろうがあっ！俺はアンタらに望まれて生まれて来たわけじゃねえんだろ？俺だって望んでアンタらを親に持ったわけじゃねえんだ！」

シンの今まで聞いたことない怒鳴り声が朱美の耳に届いた。その声を聞いて心臓が一瞬怯えた。

(シン……)

シンの声が続いて低いしゃがれ声が聞こえた。

「子供っちゅうのは皆ヤツちまったから生まれてくるんだ。理屈じやねえんだよ。好きだとか愛してるなんてそんなキレイな言葉で片付けるようなモンじゃねえんだ。だから頭使うヤツはダメなんだ。すぐあれこれ理屈をつけたがる。ったく顔だけじゃなく性格まで真珠そのものだな」

(シンのお父さん……?)

朱美の推察は正解である。初めて聞いたシンの父親の声。朱美は率直に怖いと感じた。暴力団かと思うような威圧的で音圧のあるしゃがれ声で、しかもその内容は悲しいものだった。シンのこれまでの話と重ね合わせると胸の締まる思いに包まれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8306w/>

---

親父のくせに

2011年12月24日11時29分発行